

アンソロジー  
*anthology*

ね む  
合 歡

*Vol. 11*



# 2013 秋

## 目次

春から夏へ……………	浅野純子……………	2
枯野……………	石井宏幸……………	4
サングラス……………	井上悦男……………	6
美しきもの……………	植田桂之……………	8
いきもの讃歌……………	梅田光憲……………	10
八十路の坂……………	大戸稔……………	12
梅見頃……………	桜本滋子……………	14
春夕焼け……………	角南房子……………	16
父に似る……………	高城登代……………	18
睡蓮……………	谷口利子……………	20
徒然と……………	富阪宏己……………	22
ナイル河……………	鳥越 棼……………	24
足跡……………	長尾京子……………	26
青き雨……………	名木田純子……………	28
礁波……………	信里由美子……………	30
地囃……………	蓮岡健美……………	32
こころの歩み……………	真木好子……………	34
風薫る……………	三宅 進……………	36
春めける……………	山下祐子……………	38
わが町と人……………	與田武彦……………	40
遠回り……………	米元ひとみ……………	42
ふみしめて……………	渡辺牛二……………	44
~~~~~		
麻酔……………	富阪宏己……………	46
Uさんのこと……………	渡辺牛二……………	49
翡翠……………	石井宏幸……………	51
編集後記……………	渡辺牛二……………	52

# 春から夏へ

浅野純子

初春や家族がひとり増えさうな

注連飾り家の個性が垣間見え

霜柱むんずと土を持ち上げて

チューリップ植ゑし通りに頭出し

桜咲き子らの歓声待ちわびて

東方の友より訃報若葉寒

筍を終りをはりと堪能す

いちご苗ひよいと手に取り植ゑてみる

どくだみはいつも元気でたくましく

棹五本あやつる海や夏近し

# 枯野

石井宏幸

振花の風にこたへてゐる愚直

水馬光凹めて蹴る宇宙

打水に淋しき日向あるばかり

萩明り水の昏さへなだれ込む

昼の虫闇湧き上がり湧き上がり

鷹渡る高さに主峰明けてきし

香具畝傍耳成に雲神の旅

その底に風吹き溜まり社会鍋

冬霧の沖をはるかにして無音

枯野てふ何か消えゆくところかな

# サングラス

井上悦男

サングラスご近所さんを遠ざくる

サングラス置いて居眠る散髪屋

サングラスひとつ置き去り散髪屋

サングラス三面鏡の真ん前に

つま先で風切る少女サングラス

覚えなき人の会釈やサングラス

旅したく身軽な人のサングラス

傘影に犬と散歩のサングラス

公園の山の頂サングラス

流し目にはつと俯くサングラス

# 美しきもの

植田桂之

滾る湯の湯気白くして花の冷え

桃の花続く道の辺吉備の国

花筏水の流れを見せにけり

水を張る田に雪嶺の映りけり

風に揺れ風の香となる藤の花

宿の灯の映るせせらぎ河鹿鳴く

梅雨茸や毒のあるもの美しき

麦秋や真一文字に伸ぶる雲

鈴蘭の奏づる音色美しき

万緑に大寺どつかと端座せり

# いきもの讃歌

梅田光憲

日を返し群れ飛ぶ鷗春隣

遠足の子等に全開河馬の口

雨の輪の重なり合へる水馬

動かぬは動くに勝る墓

ででむしは雨の色して生まれけり

瑠璃蜥蜴飛鳥恋ふやに石舞台

しやつくりのリズム持ちたる海月かな

吾が前の蟻のみを見る蟻の列

停年の後の足跡なめくぢら

蟻螂の決して笑ふことのなし

# 八十路の坂

大戸 稔

登りきし八十路の坂や遍路道

梨花暮れて怒涛に眠る法の宿

母校今老人センター山笑ふ

彩褪せし埴輪の里や竹の秋

もろぶたの文字大正や柏餅

採血の針跡黒し梅雨曇

梅雨冷や嘗て栄えし圃の跡

ふるさとの植田渇水落着かず

離農せし今も残像汗の父母

老斑の手に汲む清水美しく過ぐ



# 梅見頃

桜本滋子

白梅の空青々とありにけり

枝垂れ梅くぐるときめきありにけり

楊貴妃てふ梅の香に染む色に染む

盆梅の部屋より庭の梅眺め

白梅や孤独といふもそれなりに

七末社梅の明かりに並びをり

搦手は蕾の多き梅林

石室の入口封じ梅ふふむ

独り歩す至福の時の梅見頃

振り返り又ふり返り梅見人

# 春夕焼け

角南房子

猫の来て顔洗ひけり日向ぼこ

木洩れ日の数ほど灯し実万両

春時雨夜を濡らしてゆきにけり

白梅のこぼす光も枝垂れけり

芽吹く山大空が好き風が好き

句心の駆けのぼりたる花の山

春宵の島を灯してゆく渡船

純白を咲きつぐ窓辺シクラメン

思ひでは潮騒に消え桜貝

一日をまああるくまとめ春夕焼

# 父に似る

高城登代

業平に清少納言花菖蒲

紙魚の跡久しき物にありにけり

陽水の甲高き唄夏は来ぬ

父に似るタップ踏んで来夏の午后

広縁の煙管打つ音半夏雨

白髪のステッキ上げて暑気払ひ

翡翠の射る水音や里近し

枝渡る有りの儘なる蛇の衣

強き手で机硯と洗ひけり

昔日の厨を囲む濁り酒

# 睡蓮

谷口利子

睡蓮のただ影と在る静けさよ

エプロンで手を拭きをれば初蛭

蛭待つ闇深ければ水匂ふ

われに寄る蛭を母とおもひけり

万緑に未踏の深海めく世界

深海の魚になりゆく木下闇

薔薇の香におぼれて刺を忘れけり

白あぢさゐ白一色を華やげり

追憶の波打ち寄する夏の海

髪で研ぐ針や手縫の藍浴衣

# 徒然と

富阪宏己

切り株の年輪見せて初明り

窓に日の差してくるなり初句会

霜柱解けつつ土の香を立つる

雪空の晴れゆく雲の白さかな

水光るとも薄氷の光るとも

ジャズ暗く店の朧を深めをり

鐘の音の街にも届く仏生会

駆けてくる児へと更なる花吹雪

この寺とあの寺結ぶ花の道

花といふ色の散りゆく日なりけり

# ナイル河

鳥越 禁

ピラミッドへ片陰欲しき砂漠かな

涼しげにポリス駱駝で砂漠歩す

炎天下サハラ砂漠にぽつねんと

砂漠来し目にアカシヤの花優し

面崩る大スフィングスの炎暑かな

航涼しナイル両岸摩天楼

香水を五指に利きつゝ選び居り

ツタンカーメン眉根涼しきマスクかな

不夜城のナイル両岸夏の月

蒼天へモスク尖塔酷暑かな

# 足跡

長尾京子

初空の鬼門を射貫く矢立かな

赤々と春満月や鳴く鳥

青空に光放てり猫柳

長閑しや備讃の瀬戸を鳶一羽

夕明り涼しさゆるる玉のれん

声高の校庭の子等雲の峰

幽谷の苔むす岩や夏深し

稜線を流るる雲や今朝の秋

まるまると亡き父の背や温め酒

置き去りの畝の蕪の白さかな

## 青き雨

名木田純子

白壁に白き糸ひく春の雨

春時雨昼を灯して倉の町

あぢさゐの毬に沈みし青き雨

大地いま雨に整ひ実梅落つ

梅雨茸の雨の三日に育つ丈

雨降れば雨後にまたある残暑かな

雨宿りしたる茶店に栗御飯

秋雨や足跡沈みゆく大地

寒の雨光となりて枝先に

雨やんで寒さ空より降りて来し



礁波いくりなみ

信里由美子

磯笛の響ける海や鮑海女

浪音に混じる磯笛鮑海女

荒浪の息つく間ヒを鮑海女

鮑海女波と呼吸を合はせをり

鮑海女磯着の纏ふ浪の蒼

磐座へ四方の春潮ひた寄する

引き潮に海苔の匂ひの礁かな

牡蠣洗ふ水音激し荒磯宿

牡蠣焼きて荒磯の昼の濃くなりぬ

伊勢湾の礁神さぶ春の旅

## 地図

蓮岡健美

錦秋の山に影置く山の峰

匂ひ来る方を仰げば松手入

初雪の拵げし地図の指に降る

真つ白な一月一日日記書く

竹林を抜けて明るき野梅かな

柳絮とぶ空気に流れある如く

白壁の揺れて立夏の影となる

照り返す彩も芳し麦の秋

原生林太古を今に苔の花

残業の窓に守宮の夜夜来たる

## こころの歩み

真木好子

恙なきふたりの朝初雀

厳寒や母の生活の甦る

すかんぽを手折れば小気味よき音よ

古里の日暮匂へり六月尽

熊笹に掬ふ登山のヨーグルト

車輪梅ひと年ごとの高さかな

「ここよ此処」鳴く音の細し夏の虫

鱚雲還らぬ船のありにけり

ひつそりと鴨上戸熟しけり

からす瓜種も謎めきゐたりけり

# 風薫る

三宅 進

台風の濁流の中家流る

名月のあかりに浮かぶ茶席かな

両の手に吹き込む息や冬の朝

吹く風に踊る姿の枯芒

水仙花海辺の丘に咲き揃ふ

庭先に夕日差し込み日脚伸び

牧場の隅に積まれし春の雪

ふらここや子供に帰り無我夢中

庭に立つ我を彩る春夕焼

畑仕事腰を伸ばせば風薫る

# 春めける

山下祐子

縫初の糸弾く音の澄みにけり

雨上がりけふ春めける海の色

早春や日を一点に青ガラス

紙雛の小さき角や風なごむ

尾道の猫石なでて花の昼

廃牛舎暗き口あけ花すもも

日だまりは董のきつと好きな場所

山の湯の土間の豆下駄若葉風

湯の谷の風遊ばせて著菫の花

旅の夜をほろほろ酔うて桜鱒

## わが町と人

與田武彦

一枚の枯葉が語る命かな

初詣人の波にも笑顔有り

春しぐれ由加のお寺に友の顔

けふ雨水昔の仲間元気なり

春の雪長靴出して峠越え

ピーヒョロロとんびも参る彼岸かな

屋根よりも空いつばいに花ミモザ

子供らの漕ぎ出すカッター夏来る

山吹や花もだんごも由加古道

老親と笑顔で食ぶる茅卷かな

## 遠回り

米元ひとみ

軒下に薪の積まるる初紅葉

目の端をふと美しき鮠かな

きらきらと仙酔島の磯千鳥

石庭に石のあはひや実千両

傾いてゐて蝸螂でありにけり

鳥渡るドツグは巨船抱へゐて

長き夜の幕間に書く手紙かな

遠回りてふゆたかさや冬桜

ヴィオロンも白きかひなも十二月

手袋に星降る夜でありにけり

# ふみしめて

渡辺牛二

古書店の通路は狭し一葉忌

すす逃げの床屋の椅子に沈没す

ふみしめて土やはらかき霜のあと

近道を覚えし足に春の泥

一手打ち一手待つ間の遠花火

猛暑日の凄み増したる空の青

峡の空狭し銀河は近かりし

撓みつつ月にかかりし雁の棹

退屈な塩辛とんぼ寄つて来い

いわし雲空一枚を画布として



六月二十六日、抜針術という手術をした。  
 昨年の秋、車道へ飛び出す猫を両足で挟んで止めていた内、猫と一緒に深い溝へ落ちてしまった。

敏捷な猫は怪我一つしなかったようだが、運動神経の鈍い私は肋骨と左手を骨折してしまった。そのとき、骨をつないだプレートを取り出す手術だった。

肋骨の方が治りが早く、左手の方が手間取り、今になってやっとプレートが取り出せたのだ。

担当医はまだ二十代の若さで、私の息子より遙かに若い。

どちらかというと、孫に近い。

どこかの開業医の息子で、遊び遊び医学部を出て、この大病院で修行中の身なのだろう。

若い看護師に囲まれ、日々、ヒヤラヒヤラ遊んでいるのだろう。

大丈夫なのかと、最初の手術のときは心配だった。

それなのに今、プレートを取り出す手術台に寝て、この若い医師を確認すると、妙な安心感に囚われるのである。

じゃがいものような顔をした、ちよつと小太りな若い医師は、知的で、繊細で、慈愛に満ちて見えるのである。

去年の秋から今日までの半年余り、医師の素顔に触れて育ててきた信頼感なのだろう。

手術が終わって、一日は麻酔が解けないままだ。

左腕が太い楯のように思える。

左腕が失くなり、肩から重たい楯をぶらさげている感じである。

この麻酔が解け、少し落ち着くと、二十八日の金

曜から、アンソロジー合歓の原稿に取りかかるのだ。

まづ、指が動き始め、二の腕に触れると感覚が戻り、重たかった楯に生命が宿った感じだ。

手術で切り開いた部分の痛みも感じるが、骨折したときの痛みを思うと、ちよつと痒い程度だ。

### 麻酔解けゆく我が腕我に戻りつつ

さて、何を書くか、そう思い始めた頃だった。首のうしろから右にかけて、激しい痛みを襲われたのだ。痛くて首が動かせない。痛みは右肩から、右の背へ右胸にへと拡がってゆく。

そして、頭痛までしてくる。

血管が詰まり、半身不随になる前兆なのだろうか。思ったりもした。

サロンパスを十枚ほど貼ってみたが駄目だ。

顔をゆがめゆがめ考えているうちに、ふつと、あの異様に重かった左腕に思い当たった。

丸一日、重たい楯を右肩で支えていたことに。

三角巾が右肩に食い込んでいたのだ。

それにしても、正体をなくした腕とは、なんと重いのだろう。

本来、腕は私の肉体そのものだ。

私の肉体の求めに応じて、的確に応える。

私の肉体は腕に触れる風の流れさえ感知する。

まさに一心同体なのだ。

この関係が断たれたとき、腕はただの物体となる。

重たく、邪魔で、私の肉体に限りなく負担をかける。

それは、人と人との関係にも似ている。

何度も誤解を重ねながら、素顔に気づいてゆく。どこがいいのか、どこが好きなのか、定かに説明

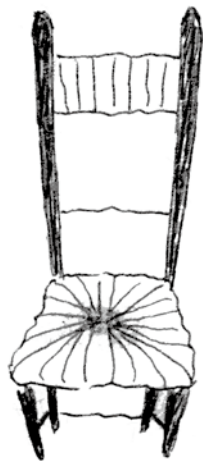
はできないけれど、その人の体温に安心できる関係。

重さも、負担も感じない関係。

麻酔の解けた腕の自由さのように。

去年の秋から半年余りかけて育てた、あの若い医師との信頼関係のように。安心感のように。

### 梅雨明の兆し病舎の玄関に



## Uさんのこと

渡辺牛二

営業マンのUさんが私的なことまで話してくれるようになったのは、亡くなる前の一年ほどのものだった。

それも少しずつで、決して多くは語らなかつた。言葉の端々に俳句のことが出てくるので、どうやらUさんも俳句仲間の一人らしいとは思つたが、訊くと「知り合いに俳句をされる方がいて・・・」とはぐらかされる。

とうとう亡くなるまで俳人であることを認めなかつた。

「Uさん田んぼは？」

「ありますよ、多くはないですが」

水を向けると少しずつ話してくれる。

「水不足で大変でしょう？」

「そうなんですよ、この辺と違って川が小さいから、大変です」

私も多少は知っているから、

「水って川上から順番に使うんでしょう？」

「それは十分に水がある時のことですよ。」

俳句の季語に「水盗む」とか「水喧嘩」とかあるでしょう。やるんですよ、あれを、実際に。

廃れ行く季語なんて言われますが、そんなことありませんですよ

少し饒舌になつてきた。

「へえ、そうなんだ」

「だって、それでその年の収穫が決まるんですよ。生きるか死ぬかですから」

「どうやって盗むんですか？」

「盗むと言ってもね、ちょっと石の角度を変えるだけなんですよ」

と、手まねをしながら説明してくれる。

「石の向きを変えて他所の田んぼに入っている水

を自分の田んぼのほうへ入れるんです。そうすれば夜の間に自分の田んぼに水が溜まる……」

「夜に？」

「そうです。」

昼間は見つかるでしょう。見つからないように夜に灯りを消して、音をたてずに……」

真つ暗だから転ぶんですよ、それでも声は出せない。「水番」に見つかりますから」

「見つかったら？」

「そりゃあ、ボコボコにされますよ。むこうだつて必死ですから」

「と言うことは、逆に盗まれることもあるんですか？」

「もちろん、ありますよ。」

私なんかサラリーマンでしょう、昼間は留守だからどうしようと盗まれます。」

朝出る前に石を動かして水が入るようにしておくんです。ところがです、夕方帰っても水が溜まっ

ていない。よく見ると、石の角度が変わってい

るんですよ、微妙に……」

「へえ、そんなことも……。大変ですなえ」

ここから口調が少し柔らかくなった。

「でもねえ、田植の時だけなんですよ。」

田植が終わるまでは皆ピリピリして一触即発状態ですが、終ればどうってことないんです。

季語に「早苗饗」ってあるでしょう。

あれをこの辺では「しろみて」って言うんですが、それをやって、皆で集まって飲んで騒いで、後は仲良く……」

「あ、今日も出掛けに水を入れて来たんです……」

Uさんは喋りすぎたと思ったのか、そう言うときとそくさと帰って行った。

時計は午後五時を回っていた。

今日も俳人であることは認めなかった。

## 翡翠

石井宏幸

はつきりと翡翠色にとびにけり

中村草田男

「空の宝石」と呼ばれる翡翠だが、存外、近くに棲む。留鳥で一年中見ることが出来るが、私も、早島支援学校への通勤では、岡山市箕島地内の農業用水の柵に止まっているのを数回、現在の県庁への通勤では、笹が瀬川の電線に止まっているのを十数回も見かけている。また、都市を貫く芦屋川の虚子記念文学館近くの河川敷でさえも数回見かけた。

大瑠璃にも高知県の山中のダム湖で出会ってその囀りと瑠璃色に感激したが、色だけであれば翡翠の青は涼しく、鮮烈。その青を草田男は翡翠色と言いつつ切った。

翡翠の掠めし水のみだれのみ

中村汀女

翡翠は、何かに止まっている時に、リズムカルにクイックイックと首をもたげる。機械仕掛けとも思い、可愛いとも思うが、足下の魚に狙いを定めると急降下して頭から水に突っ込み、長い嘴で捕らえる。美しいのみでなく、命の営みとしてハンターの性を持つ。汀女の句は狩りとは限らないが、翡翠の飛翔により破られた水の景のしづけさを詠う。水自体が翡翠の掠めた青に驚いたように。

先日、久米南町の山中に朴の花を見に出かけた。一人で毎年行く場所ので、去年は偶然慈悲心鳥の囀りを聞くことができたが、今年は、こんなに近い枝でと思う時鳥の囀りと、万緑の迫る足下の堰の水の昏さを横切る翡翠に出会うことが出来た。

水影も色の一閃ひすぬ消ゆ

宏幸

◆今号では三度目の登場になりました。もう飽いたと思われるでしょうが、もう少しの辛抱です。

◆今号から締切が一ヶ月遅くなりましたが、原稿をお寄せいただいた皆様はどう感じられたでしょうか？

◆前のほうが良かった。もう少しずらしたほうが良い。いろいろな意見があると思います。お聞かせいただければ次号からの参考にさせていただきます。

◆私は一ヶ月遅れたおかげで、こうして梅雨の雨音を聞きながら、編集後記を書いています。窓の外には濡れた緑がきれいです。まんざら悪くはないなあ。

◆今年になってから、県立図書館のカードを作って利用しています。県

立図書館の蔵書をネットで予約すれば、近くの図書館に届けてもらえると言う、田舎暮らしの私にはなんとも便利なサービスです。

◆特に最近の句集など、近くの図書館には少ないので重宝しています。

◆興味のある方は、近くの図書館で聞けば教えていただけると思いますので、是非ご利用ください。

◆さて、今号もそうですが、投稿していた中には、まだお会いしたことがない方が大勢いらつしやいます。

◆たくさんの佳句を眼にしながら、どんな方が詠まれたのだろう、機会があれば是非お会いしてみたいものだ、と思う今日この頃です。

早苗饗の皆皴ふかき顔ばかり

(牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.11

平成 25 年 9 月 1 日 発行

発 行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印 刷 弘文社

岡山県津山市川崎 168

連 絡 先

〒 701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 25 年 12 月 28 日

原稿送付先

〒 708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemunokai.net

Tel. : 090-8710-7067

平成二十五年九月一日発行 第十一号